

札幌会場の道路競技運営について

1 Overview of MGC

2017年11月の競技役員（NTO）資格取得研修会の結果を受け、私は東京2020オリンピック・パラリンピックについては道路競技担当の総務員ということで活動を開始することになった。「オールジャパン」体制が唱えられていたものの、道路競技については、地元の東京陸協の関わりが必要ということでの人選であったかもしれない。

そこでの最初の目標となったのが、2019年9月に開催が決定していたマラソングランドチャンピオンシップ（以下、MGC）の開催と、それに向けての体制づくりであった。MGCは男女2位までが東京2020のマラソン代表に内定する大会としての位置づけと同時に、東京2020マラソンのリハーサル大会でもあった。スタート・フィニッシュを除いては本番と同じコースに設定されており、MGCの運営体制が、基本的にはオリンピックの競技運営体制を方向付けることになっていた。

2018年5月31日に東京2020マラソンコースが発表された。その後の最初の課題は、MGC、しいては東京2020マラソンの競技役員体制を決めることであった。一般的な日本のマラソン大会では、審判資格を持った競技役員がコース上に立ってコースの監察をする。しかし、オリンピックにおいては前回開催のリオデジャネイロをはじめとして、コース上の人員は必要最低限とされ、配置されるとしてもボランティアのみ。競技役員が配置されることはほとんどない。さらに、オリンピックにおける競技運営の決定権は、あくまで国際競技団体【陸上競技の場合は世界陸連（WA / 2018年当時は国際陸連=IAAF）】にあり、開催国はその決定に従うことになっていた。

当時のマラソンのスポーツマネージャーと競技役員体制に関し、最初に打合せを持ったのが2018年8月である。それから、9月、11月と組織委員会、日本陸連、東京マラソン財団を含めた協議の中で、競技役員体制の大枠が定まってきた。

その内容は、①スタート・フィニッシュの国立競技場内はトラ

東京陸上競技協会競技運営委員長

野末雅文 NOZUE Masafumi

ック&フィールドのNTOが業務を行う。②コース上に関しては新たにNTOを増員し、コース監察と飲食物供給所の業務を行う。③それ以外のコースの安全確保に関してはボランティアが行うが、その中には審判員資格を持った東京陸協の公認審判員も競技ボランティアとして参画する、の3点である。

この時、コース上のNTOの必要性に関して根拠となったのは、競技規則のうち道路競走のレース管理に関する現在のTR55.9～55.11と、水・スポンジおよび飲食物供給所に関するTR55.8である。これらの条文を基に、コース上でショートカットが起きる可能性のある直角に曲がる交差点や、競技者が離脱する可能性のあるトイレの設置箇所、そして飲食物の受け取りに関して違反行為の起こる可能性のある飲食物供給所に、ジャッジを下す資格のあるNTOを配置する必要があるとしたのである。

これについては、鈴木一弘スポーツマネージャーのご尽力によって2019年2月によくIAAFにも認められ、道路競技におけるNTOの大幅な増員が達成できた。このことは札幌にコースが移った際に、結果として非常に役立つことになる。

その後、2019年4月29日と30日に改めて道路競技担当のNTO資格取得研修会が開催された。道路競技のNTOに関してもトラック&フィールドと同様、オールジャパン体制で2020年時に年齢60歳未満という前提が踏襲された。

MGC本番

2019年5月に道路競技担当のNTO49名が発表された。東京のコースを基に監察員、飲食物供給所を中心に67名のNTOの増員を想定していたので、予定より若干少なかったものの、このメンバーを加えたかたちでMGCに望むこととなった。

MGCの競技役員編制に関しては、基本的に日本陸連で行われ、私自身はMeeting Manager（大会総務）として従事することになった。また当初の計画通り、スタート・フィニッシュ及び技術総務系統はトラック&フィールドのNTO、コース関係は道路競技のNTOが割り当てられることになった。

MGCの状況が競技運営サイドに本格的に伝わってきたのは、7月11日の主任会議からである。東京マラソンを運営している東京マラソン財団が中心となって準備は進められており、その概要がこの時に示された。ただ、この時点で競技運営マニュアルは作成されておらず、鈴木スポーツマネージャーからその原案が示されたのは8月1日になってからである。

ここからが私にとっての正念場となった。競技運営マニュアルをチェックし、修正箇所および検討箇所の洗い出しと関係者への確認・修正依頼、そして関係者から送られてくる改訂版の校正の連続である。それに加えて、8月からはMGCに関する

会議・説明会が数多く組まれるようになっていた。私としては、出席が義務づけられない会議の説明会でもオブザーバーとして時間の許す限り参加することとした。そこで配付される資料や説明の内容が他の会議（特に競技役員関係）の内容と整合性がとれているかを確認したかったからである。特に、ボランティアへの説明と競技役員（MGCでは監察員以外のコース審判員は東京陸協の競技役員を委嘱していた）への説明、サービス内容に齟齬がないかについては特に注意した。これら会議・説明会の内容・議事を基本にマニュアルを再度チェックし、より良いものができるよう注力をした。

総務・総務員の役割として競技役員に対する会議・説明会を、いかに取り仕切り、いかに参加者に理解してもらい、いかに当日スムーズに業務を遂行してもらおうかが、重要であると私は感じている。個人的には、人前で話をするのが苦手な方なので、担当部署の責任者には、事前に説明事項を割り振り、当日は準備した内容を説明してもらうようにしている。MGCについて

2 Change to Sapporo

札幌への変更と延期、そして本番へ

東京2020マラソン・競歩の札幌への開催地変更のニュースが届いたのは、MGCが開催された翌月のことであった。この一報を聞いた時は、まさかと思うと同時に、開催地には決定権がないという「またか」という思い、そして、「せっかくここまでできたのに、どうして」というなんとも言えないむなしさを感じた。NTO以外の多くの東京陸協の審判員にとって、開催都市であるにもかかわらず、オリンピックの競技運営に直接関わられるのは道路競技のみであったため、これではオリンピックが行われても何も残らないという矛盾も感じた。

その後、11月1日に正式に札幌でのオリンピックのマラソン・競歩の開催が決定した。それからは、当然のことながら特に何のアプローチもなく、私個人としては、オリンピックは何か他人事であるかのような気さえていた。

年が明けて、本来であればオリンピックイヤーである2020年2月、新型コロナウイルス感染症の発生と世界的な感染拡大が起こり、多くの競技会が中止、延期となる中、東京2020についても3月25日に正式に延期が決定された。

通常では絶対にありえないような事態が起きてしまう東京2020。新型コロナウイルスによる延期については、札幌への開催地変更ほどのショックはなかった。むしろ、ここまで予測不能なことがいろいろ起きると、どうにでもなれという気分であった。

札幌マラソンフェスティバル

2020年は競技会の中止、延期への対応、そして競技会が開催されるとなれば、感染症対策の立案と、新型コロナウイルス感染症に翻弄された。東京では7月に東京選手権、8月にセイコーゴールデングランプリと、かなり早い段階で競技会を開催

は、60歳未満等という年齢制限もあり、総務員や監察員主任も、今まで大きな大会では経験のない人を抜擢したが、期待以上の成果を発揮してもらえたのではと考えている。

MGC前日のコース管理合同最終ミーティング、NTO全体会議を無事終えた。NTOはもとより、本番を見据えてコースの東京陸協の競技役員も60歳未満ということもあり、この種の普段の会議とは異なる熱気も感じられ、大会当日（9月15日）を迎えることになった。

当日は、オメガ（オリンピックのリハーサルとして計測を担当）の準備したピストルに不具合が生じ、スタート時刻が遅れるといったアクシデントはあったものの、NTO及び競技役員サイドでの問題はなかった。天気も良く、大会終了後、競技役員として従事した人の顔は皆晴れ晴れとしており、大きな大会をやり遂げたという充実感にあふれているように感じた。私自身も、このときは本番に向けての手応えを感じたが、まさかこの後に波乱の展開が待ち受けているとは予想できなかった。

したこともあり、具体的な感染対策の面、そしてセイコーゴールデングランプリでは初めて陸上競技で国立競技場を使用するといった部分でも注目を集め、それに対する企画・準備に追われた。

そのような中で、8月4日に東京2020マラソン・競歩のキックオフ会議が陸連事務局で開催された。ここで初めて組織委員会、日本陸連、北海道新聞、北海道陸協との顔合わせと概要の説明が行われた。本番までの濃密な期間をともにすることとなる組織委員会の長澤氏、石田氏、北海道新聞の高野氏、小山氏とは、ここが事実上の初顔合わせであった。

ただ、実際のところこれ以降は、特に情報が提供されることもなく時は過ぎ、12月になって、鈴木スポーツマネージャーより2021年5月5日に札幌でマラソンのテストイベントが行われることが通知された。そして、2021年2月にテストイベント参加の意向調査が行われ、オンラインでの情報共有会が開催されたのは3月9日であった。ここで初めて、テストイベントの札幌マラソンフェスティバルの開催概要と競技役員編制を知ることとなる。

競技役員に関しては、MGCを経験した各都道府県選出の道路競技担当NTOに、新たに北海道選出のNTOも加わるかたちとなった。4月16日の事前打ち合わせを経て、22日に2度目の情報共有会が行われ、ここで競技運営概要（マニュアル）が示されるに至った。2020年の6月に、前任の陸連競技運営委員会の岩崎氏が辞退されたための後任として、オリンピックのマラソン・競歩に関して、私はこの時Competition Directorという立場にあった。しかし、札幌にはこの時まで行ったことがなく、土地勘もない上に、札幌に開催が決まっからの状況や経緯もまったくわからない。そのため、競技運営概要に関してのみ確認作業を開始した。



ング。そして、すぐに山場の8月6日を迎える。

8月6日の男子50km競歩と女子20km競歩

男子50km競歩のスタートは朝5時30分である。N T Oの会場入りはスタート3時間前に設定されており、2時30分会場入りのため、ホテルからのバスは2時15分には出発する。そのため睡眠を含め、休める時間は短い。それに加え、この日の札幌は記録的な暑さとなった。

スタートの5時30分時点のコンディションは気温25度、湿度86%、参加者は59名である。レースが始まると、コース上から無線で前日より早い段階から、たくさんの情報がもたらされることになった。「止まりそう」「止まった」「うずくまった」「起き上がれない」「救護が必要」「嘔吐している」。7時30分を過ぎると、対応する3名の総務員の声が、競技運営本部内に常に響き渡る状態となっていた。結果、D N F10名、D Q2名、フィニッシュした人数は47名であった。

男子50km競歩については、レース自体も過酷ではあったが、競技終了後にもアクシデントが起きた。札幌で行われる種目に関しては、メダルが授与される表彰式 (Medal Ceremony) は東京の国立競技場で行われるものの、レース終了後、入賞者に対し、花束を贈呈するセレモニー (Venue Ceremony) が行われることになっている。メダルハンターには、3位までの入賞者の動向を常に追いつつ、Venue Ceremonyに導くという任務がある。そこに、札幌入りしてから1つのミッションが追加されることになった。

オリンピックのセレモニーにおいては、各チーム (各国) の公式のジャージでの参加が義務づけられている。しかし、選手はフィニッシュ後、ユニフォーム姿でミックスゾーンにおいてインタビュー等を受けている。そのため、この間にチームテントに行き、チーム関係者からその選手のチームジャージをピックアップしてくるという任務である。前日の男子20km競歩においては、2位と3位が日本人選手だったこともあり、その対応はうまくいき、Venue Ceremonyはレース終了後、速やかに行われた。しかし、今回はそうはいかなかった。チームテントに行ってもチーム関係者はいない。やっとチーム関係者を見つけたところ、何と優勝した選手がチームジャージを会場に持参していなかったのである。

チームジャージを着用しない以上、セレモニーは行えない。そこで選手村のホテルまでチーム関係者にチームジャージを取りに行ってもらうことになった。これには本部からアールピーズの前島信氏がアテンドをした。タクシーでの往復であるが、

近の昼間の気温計は33度を示すといった状況である。

3日にほとんどのN T Oも札幌入りし、ウェアの配付も行われ、本番モードが高まってくる。4日の午前中は会場の見学、そして、午後からは交通規制を本番並みに拡大して競歩のドレスリハーサルが実施された。ここでの大きな課題は、招集所から選手をスタート地点に向かわせ、スタート地点での整列、有力選手の紹介を行ったうえで、最終的に定時にスタートをさせることである。この一連の流れを翌日に控えた男子20km競歩の予定時刻で行った。それぞれの部分での確認作業も行われたため、当初の予定時刻にはスタートはできなかったが、実際に行ったことで、各部署のN T Oも時間的な感覚をつかめてきたようであった。

男子20km競歩

8月5日はいよいよ最初の種目、男子20km競歩が16時30分にスタートする。当日の午前中は、会場に来て部署ごとの確認と準備を行う。一旦ホテルに戻って昼食を摂った後、13時30分に再度会場入り。この日の最高気温は33度。照りつける日差しが熱い。

14時頃から、選手村からのバスの到着が始まる。そこで大きな問題が持ち上がる。準備していた「氷」がなくなりそうだという報告が、競技運営本部にもたらされたのである。暑さのせいで、各国の選手団が大量の氷を持っていき、選手村からのバスが2台到着した時点で、用意していた氷がほぼなくなってしまったのだ。至る所から「氷はどうしたのか?」という催促が本部に入り、その対応に追われた。結果、しばらくして対応できる製氷業者が見つかり、遅ればせながら事なきを得た。

そうこうしているうちにスタート時間が迫ってきた。心配していたスタートも無難に行われた。道路競技の運営においては、「定時にスタートさせること」と並んで、スタートした競技者数が、フィニッシュした競技者数と途中棄権した競技者の合計と合致すること、また途中棄権した競技者が確実に収容されているかがポイントとなる。男子20km競歩は、当初のスタートリスト通り57名の参加で行われた (オリンピックという競技会の性格上、会場での突然の欠場ということはなく、全種目にわたってスタートリストの人数でスタートは行われた)。

競歩に関しては、コース管理・競技者管理の総務員2名体制で、エリアと監察員のN T Oからの無線、飲食物供給担当総務員が各パーソナル、ゼネラルテーブルからの無線を受けることでコースの状況を把握するかたちをとった。レースが始まって少し立つと、「〇〇番の選手が止まった」「〇〇番の選手がうずくまった」「嘔吐をした」「再び歩き出した」等さまざまな情報が飛び込んできた。その都度、競技本部内の別系統で救護や清掃チームと連絡をとり、対応に当たっていた。本人からの申告または救護チームの判断でリタイア確定の連絡が入ると、こちらから一斉無線で発報をし、その内容を記録センターで集計、D N Fとして発表となった。競歩に関しては歩型違反による失格もあるので、その場合は競歩審判員から記録センターに失格者情報が伝えられ、記録センターから本部にその内容が伝達されるという流れで情報が共有された。

競技終了後、T Dからは氷の不足、嘔吐への対応ということで指摘があったものの、最初にしては非常に良い運営であったとの評価をいただいた。この後、19時にバスで会場を出発し、ホテル自室で夕食の弁当と20時15分にリモートでのブリーフィ

スタート・フィニッシュ付近では、女性競技者への対応やテレビカメラに映り込む可能性も高いことから、スタート・フィニッシュに関係する部署では、できる限り男女同数になるよう配慮した。そのようなことで、M G Cやテストイベントではコース上で監察や飲食物供給に携わっていた方のうち、多くの方にスタート・フィニッシュ周りに移っていただくことになった。

また、コース上との無線系統については、コースの設営・撤収の確認、コース上のアクシデントや、エリアスタッフについて連絡するエリア長との連絡と、規則違反を報告する走路監察員 (N T O) からの情報系統をM G Cと同様に分離した (途中棄権者情報についてはどちらからも連絡を受ける)。エリア長との連絡をコース管理担当総務員として北海道陸協の方をお願いし、走路監察員からの情報についてはM G Cでも対応した監察員主任の方に競技者管理担当総務員を兼務するかたちで、再度そのポジションで任務を担っていただくこととした。

競歩に関しては、かつての日本記録保持者でもあり、プロパーである組織委員会の石田大介 (旧姓：池島) 氏に、ほぼお任せであった。JR W Jの資格を持つ方は、競歩においてはIR W Jの補佐、周回記録、ペナルティゾーンといった競歩特有の業務に携わることが決まっていたため、マラソンについては主として、周回や飲食物供給所の業務をお願いした。

札幌の道路競技は、8月5日に男子20km競歩 (16:30スタート)、8月6日に男子50km競歩 (5:30スタート) と女子20km競歩 (16:30スタート) を行い、8月7日に女子マラソン (当初は7:00スタート)、8月8日に男子マラソン (7:00スタート) を行う日程となっていた。真夏の暑さの中、特に5日から7日まではタイトなスケジュールが組まれていた。そこで暑い中、長時間立ち続けることになる監察員の方については、20km競歩と50km競歩に従事する人を分ける措置もとった。

長澤氏、石田氏、高野氏、そして北海道陸協の大会総務の方に、これらの提案についてご理解をいただき、競技役員編制が確定するに至った。

5月下旬から7月の大会直前までは、リモートでのN T Oへの情報共有会、主任会議、各分科会とそれに向けての打ち合わせ、そしてマニュアルの確認作業と細部の懸念事項への対応と、オリンピック準備に向けての対応一色となった。特に、私はマニュアルの競技注意事項、N T Oの業務内容に力点を置いて作業を行った。長澤氏、高野氏、石田氏と頻繁なメールのやりとりを行いつつ、確認作業を進めていった。この期間、私でさえかなり時間をとられていたので、組織委員会や高野氏の仕事量はどれほどのものであったか想像がつかない。

そして、7月30日に再度、札幌入りすることになる。

の外出は禁止となっている。そのため、徒歩でホテルを出ることはできず、街中を散歩することさえできない。競技会場まで徒歩圏内であるにもかかわらず、タクシーの利用が義務づけられる。朝の食事は、ホテルのビュッフェであるが、昼と夜はホテル自室での弁当という生活であった。

31日は大会会場の視察と、夜にはコース上のレコードライン塗布の立ち会いを行い、1日はマラソンのドレスリハーサルと自動車でのコース確認を行った。札幌といえども、スタート付

北海道新聞の高野氏は北海道マラソンの開催にも携われていたため、そのノウハウの蓄積があり、マニュアルはわかりやすくレイアウトされていた。そこに、M G Cやその他のマラソンの経験を基にした確認や提案をさせていただき、短い期間の中でご対応いただいた。

2021年5月5日、札幌マラソンフェスティバルは、新型コロナウイルスの感染再拡大が懸念される中で開催された。ハーフマラソンと10kmの部が行われ、ハーフマラソンはオリンピック本番コースの1周目の大きな周回コースを使用するものであり、オリンピック代表選手を含むエリートランナーが参加した。一方、10kmの部は、当初はエリートランナーと市民ランナーの参加で行われる予定であったが、新型コロナの感染拡大に伴い、エリートランナーのみでの実施となった。

新しいコース、新しい体制で望んだテストイベントであり、滞りなく終了はできたものの、実施したことによって本番に向けて数多くの課題が浮き彫りになってきた。

本番に向けて

この大会を終えて着手したのは、競技役員体制の再構築であった。

まず、スタート・フィニッシュ周りの競技役員の増員と、役割分担の徹底である。M G Cではトラック&フィールドのN T Oがスタート・フィニッシュ部分を担っており、十分な人数が確保されていた反面、この大会では競技者係、出発係、マーシャル、P E C係は兼務となっており、特に招集所での業務や、スタート地点への誘導に支障をきたしていた。また、ウォーミングアップエリアを管理する競技役員も置かれておらず、その対応にもこれらの競技役員が当たっていた。この部分は、通常の市民マラソンでは問題とはならないかもしれないが、エリートランナーのみの大会では結果として、トラック&フィールドの方式に近づけた方がよかった。

そこで、競技者係とP E C係は兼務するものの、マーシャルと出発係は独立させた。競技者係はスタート前には招集所での任務に専念し、フィニッシュ後はP E C係としてミックスゾーンからP E C R (ポストイベントコントロールルーム：場所としてはスタート時の招集所) までの管理を行うこととした。そして、マーシャルにはウォーミングアップエリアの管理と、招集所からスタート地点までの誘導、途中棄権者の対応、フィニッシュテープ、フィニッシュからミックスゾーンまでの管理を行ってもらい、出発係とスターターにはフィニッシュ後はメダルハンターもしくは決勝審判業務を兼務してもらうこととした。

3 4Days of TOKYO 2020

オリンピック本番

東京2020に関しては、コロナ禍の中での大会ということで競技役員についても行動規制がかけられた。30日の夜にホテルにチェックインして以降は、業務での乗り物を用いての移動以外

テルから出発する。本部のスタッフも、昨日までとは異なり、表情もすっきりとしている。

4時30分にウォームアップエリアがオープン。少しすると選手も徐々に入ってくる。6時30分に招集が開始され、滞りなく終わると、6時50分にスタート地点への誘導開始。スタート地点に整列の後、有力選手の紹介、そして7時00分スタート。一連の流れは完璧だった。

男子マラソンスタート時のコンディションは気温26度、湿度80%。前日とほぼ同じ条件だが、風が強い。組織委員会からエリアに対し、風が強い場合にはシンボルマークの入った幕等を、鉄柵やテーブルが倒れないようにそこから外してもよいとの指示も出た。出場人数は106名。スタート序盤、5kmを過ぎた時点で早くも、選手の異常を知らせる無線が入ってくる。それからの本部は戦闘状況であった。8.9km付近で最初の棄権者が出て、メディカル要請が入ったのを皮切りに、刻一刻と異なるナンバーの選手の状況が矢継ぎ早に入ってくる。「歩き出した」「止まった」「うずくまっている」「動けない」「収容車を待っている」「メディカルを寄越してほしい」。中間地点に行く前に、すでに10名以上の途中棄権者が出る。記録センターからもDNFの照会が入り、そのナンバーを読み上げる。その後も無線からの連絡は途絶えず、新たな選手の情報が次々と入ってくる。担当総務員やスタッフの声が本部内に響き続ける。

男子マラソンに関しては最終的に30名もの棄権者が出た。フィニッシュした競技者の中でも、そのまま医務室に直行するケースも多く（入賞者の中にも医務室から出られない選手がいて、セレモニーの開始も少し遅くなった）、非常に過酷なレースとなった。

Venue Ceremony終了後、会場内にいるNTOに集まっていただけ、最後のミーティングを行った。マラソンという性格上、コース上のNTOが集まらなかったのは非常に残念であったが、組織委員会、TDから最後の言葉をいただいた。特にその中でも高野氏のスピーチは印象的だった。



度お願いをすると、快く引き受けていただいたり、忙しくて手の回らない部署があると、時間が空いている部署の方が自発的に動いてくれたりもした。

例を挙げれば、競歩の監察員に関して20kmと50kmでシフトを分けたが、シフトに入っていない人も、率先して追加的な業務や他の部署のサポートを行っていた。今回は特に、スタート時刻の変更をはじめとする予期せぬ変更や、突発的な事態も多かった。それらに対しても事態を冷静に受け入れ、臨機応変な対応をいただいた。

この間の札幌は、選手にとって過酷な条件であったと同時に、NTOにとっても過酷なスケジュールとコンディションであった。しかし、厳しい条件下で乗り切ったからこそ、充実感と達成感が得られたのではと思う。

私自身、東京2020道路競技に関わるが決まってから約3年半、山あり谷あり、やり甲斐もあった反面、むなしさ、やるせなさも感じた。しかし、終わってみれば携わって良かったというのが実感である。この思いを共有し、今後につなげられればと感じるところである。

とは異なり、走れなくなった選手をいかに早く収容するかも課題である。

しかし、周回コースの上、特に北海道大学の構内の道幅は狭く、構内でレースが進行している限りは、大型のアスリートピックアップバスは入ってはいけない。それでも、救急を要する場合については、救護車両がその中をレースに支障をきたさないよう向かっていかなければならない。自ずと現場を含めた連携が必要になってくる。

40～50分ほどしてくると、コースからの無線が入り出し、本部内は、にわかには騒々しくなってくる。連絡を受ける総務員の声が大きくなる。いろいろな選手の状態がアップデートされて入ってくる。その中には救護要請もある。最終的には88名の出場者に対し、15名の途中棄権者が出た。

女子マラソンにおいては、パーソナルドリンクの取り間違いに関しての抗議があった。国名のABC順にパーソナルドリンクが並べられているのだが、その国名が表示されているサインの前と後ろでボトルを取り違えた選手がおり、取られた選手のチームから抗議が出た。これについてはTICとTDで対応した。

レース終了後のVenue Ceremonyに向けての入賞者の確保、ジャージのピックアップ、入賞者及びチーム関係者に対する説明、そしてセレモニーの実施という流れについては、回を重ねるたびに洗練されていった。

いろいろなことがありつつも、女子マラソンは無事終了し、怒濤の3日間が過ぎた。あとは翌日の男子マラソンを残すのみである。この日の午後は、ひとときの休息がとれた。

男子マラソン

8日の男子マラソンに関しては、スタート時刻の変更もなく（これが当たり前なのだが）、当初の予定通り進んだ。コース上への車両が午前3時00分、会場へのバスが午前3時30分にホ

After TOKYO 2020

オリンピックを終えて

私の役割としては、組織委員会とNTOの橋渡しとして、組織委員会に対して競技運営サイドからの疑問点や検討事項の提示と、それを解決するための提案をする一方、NTOに対しては、必要な業務の洗い出しをした上で、それぞれの分担ごとの業務を明確にしていくことであったのかと思う。それがどこまでできていたかは、現場のNTOの方の判断によると思う。

ただ、はっきり言えるのは、今回の東京2020道路競技を乗り越えられたのは、各都道府県から集まったNTOの方の能力と意識の高さであった。今まで経験したことのない部署に配属された方も多かったと思うが、積極的にコミュニケーションを取り、事前に業務内容を理解し、現場ではSNSも活用してリアルタイムで情報を共有し、的確に動いていただいた。札幌に入ってから、新たな業務や見落としていた業務が出て、その都

置先に散らばってしまうため、スタート4時間前にホテルを出発するスケジュールが組まれていた。そのため、当初は午前3時の予定であったが、繰り上げに伴い、午前2時にホテル出発の想定となった。しかし、急な決定のため、車両自体の手配が間に合わず、結果として2時30分～3時00分からの動き出しとなった。競技運営本部に着くと、組織委員会や北海道新聞の方は、すでにそこにいた。徹夜で連絡等の対応にあたっていたとのことである。

女子マラソンでは、スタート時刻の変更以外にも大きなアクシデントがあった。それはスタート前の招集所での出来事である。招集開始はスタート30分前、招集完了はスタート20分前に設定されている。

招集所ではアクレディテーション（ACR）での本人確認、ACRの預かり、ユニフォーム・持ち込み禁止品の確認、トランスポンダーの反応チェックが行われる。招集所内で選手は1列に並んで、これら一連のチェックを受けて、招集所から出てくる。日本人選手は招集所の入口の最後部に並んでいた。しかし、招集完了時刻が過ぎ、他の外国人選手は招集所から出てきているのに、スタート15分前になっても日本人選手は出てこない。そこで、招集所審判長に確認をしたところ、次のようなことが判明した。

日本人選手のアスリートビブスには暑さ対策のため、さまざまな大きさの穴が多数開けられていた。TR5.9の規定から、日本チームはそれを認められると考えていたのに対し、TDとITOはそれは認められないとしたため、招集所を通過できなくなっていたのである。他の選手はスタート地点への移動を開始してしまい、時間がない。急遽、アスリートビブスの再発行を決定し、ビブス再発行用のプリンターのあるTICに向かった。

この時、スタート10分前。そこからプリンターでアスリートビブスを発行する。この時のプリンターの速度がいかに遅く思えたことか。TICはチームテントエリア内の中でも招集所から最も離れたところにある。1枚印刷するごとに、NTOが1人ずつそれを持って招集所に走って行く。6枚目を印刷し終えたのがスタート5分前。かろうじて間に合ったという状況であった。東京に帰ってから、テレビの録画でスタート場面を見たが、選手はそんなことが裏であったことなど微塵も感じさせず、スタート地点に立っていたのが驚きであった。

スタート後、少ししてからコース上から無線が入る。路上にトランスポンダーが落ちているとの連絡であった。ナンバーを確認すると、また日本人選手のものであった。そして記録センターにそのことを告げると、5kmのチェックポイントで、その選手以外にもトランスポンダーに反応がない選手がいるので確認をしてくれとのことであった。その番号を聞くと、またも日本人選手のものであった。この段階では途中棄権者もなく、その選手はテレビ画面で確認できる。こちらもトランスポンダーが外れたようであり、もし路上に落ちていたら回収するようお願いをした。中継を見られた方で、各チェックポイントで日本人選手が通過した際に、画面上で途中順位や記録が出てこなかったのを不思議に思われた方もいるかもしれないが、原因はこのためである。

スタート時刻を早めているとはいえ、6時00分時点の気温は25度である。そして湿度も高い。マラソンからは本部内にメディカルの無線チームも同居し、連携をとるようになっている。コースは大周回を1周と、北海道大学構内を中心とした小周回を2周するコースとなっている。競歩の往復1km、2kmコース

札幌のメインストリートを交通規制している以上、周辺道路は大渋滞である。なかなか戻って来られず、Venue Ceremonyは予定よりも90分以上遅れて行われた（ちなみに前島氏はこの日、女子20km競歩のスタート前にも、ある外国の選手がチームユニフォームを忘れ、それにも付き添ったため、この日は2度選手村をタクシーで往復することになった）。女子20km競歩のスタートは16時30分のため、午後の会場入りは13時30分である。本来は少しホテルで休養ができるはずであったが、昼食を摂ってのんびりとなりとなった。

午後に競技運営本部へ戻ってくると、ここで待機していた組織委員会や北海道新聞の方の様子が何となくおかしなように思えた。次に行われるレースに集中するというよりも、何か別の方向に意識がいつているかのようであった。その理由は、電話での応対や話の節々から、少しずつ呑み込めてきた。

不穏な雰囲気の中、女子20km競歩はスタートした。しかし、競技運営本部に長澤氏の姿はない。午前中の状況を経験したせいか、コースとのやりとりも比較的落ち着いているかのように思えた。このレースでは途中、コースからトランスポンダーが落ちているとの連絡が入った。その番号は日本人選手のものであった。記録センターにもその旨を伝え、対応してもらった。トランスポンダーが外れると、マッドで情報が読み込めないため、途中経過が表示されない。ただ、フィニッシュは写真判定装置で判定しているため問題はない（途中、選手から監察員にトランスポンダーが外れていても大丈夫かの質問もあったようで、それについては問題なしとの回答してもらった）。このレースは、前の2レースと比較すると、だいぶ落ち着いていたこともあり、レース終盤に私自身はじめて、FOPに面した歩道に出向いた。VIP席には、国際オリンピック委員会（IOC）のトーマス・バッハ会長、WAのセバスチャン・コー会長、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の橋本聖子会長の姿も見ることができた。

先頭がフィニッシュし、競技運営本部に戻ってしばらくすると、長澤氏より神妙な面持ちで「話があります」と言われた。そして「明日の女子マラソンのスタート時刻が1時間繰り上がり、6時00分とすることが決まりました。」と告げられた。

スタート時刻の変更と女子マラソン

午後の状況から薄々気がついてはいたが、暑さを避けるためという理由でのスタート時刻の繰り上げである。女子マラソンのスタート時刻は8月7日の7時00分で、札幌での開催が決まった時からすべてのことは動いてきた。選手はもとより、マラソンには非常に多くの人に関わる。影響はボランティア、警備、関連施設、物品、車両、報道等すべてのものに及ぶ。すべてが7時を前提に準備され、連絡も段取りもすべてが終わっている。それをこの前日の、しかもスタート予定の12時間前に決めるなど、あり得ないことが起こり続けてきた東京2020マラソンをまさに象徴する出来事となった。

WAのコー会長がチームテントエリアに各国のチーム代表者を集めて了承を得た後、正式に6時00分スタートが決定した。その後、NTO全員を集めて、その内容について長澤氏から説明が行われた。説明と協議の結果、少しでも休養する時間が必要ということで、リモートでのブリーフィングをせず、当初のスケジュールをすべて1時間早めて行うことが決まった。

マラソンでは、監察や飲食物供給所のNTOはコース上の配